

# 中谷宇吉郎博士 のこと

教科書展示会で某社の理科の教科書をめくって見て驚いた。表紙裏に中谷宇吉郎博士が雪の結晶を顕微鏡で覗いている写真と、つぎのページには「雪は天から送られた手紙である」という掛け軸を載せていた。今までにない大胆な編集である。博士は雪の結晶をすべて人工的につくることで、地上に降る雪によって上空かなたの気温や湿度、水蒸気の量から雪の成長過程を明らかにした。ため息がでるような美しい雪の結晶を博士は『天からの手紙』と言ったのである。

教員になって六年目だったと思うのだが、新聞記事の話の中に中谷宇吉郎博士の名前があったことを覚えていた。私は市内の書店にあった「中谷宇吉郎随筆選集」三巻を見つけて思い切った購入した。それ以来、この本は私のバイブルともいえる大事な本になった。授業のアイデアが生まれない時、気分が乗らない時はよく読んだ。「雪の十勝」「雪を作る話」「雪の話」「雪雑記」など、雪について話の面白さは当たり前として、「線香花火」「立春の卵」、夏

目漱石の「吾輩は猫である」の思い出話なども興味深く書かれていた。中でも授業に使った「立春の卵」の話は生徒にも人気があった。それは、このような書き出しで始まる。

「立春の時に卵が立つ」という話は、近來にない愉快な話であった。二月六日の各新聞は、写真入りで大々的にこの新発見を報道している。もちろんこれは或る意味では全紙面を割いてもい

## 教育随想



さいたま市立大原中学校長

鈴木 一夫

いくらいの大事事件なのである。……立春の日だけに卵が立つといふいかにも不思議で興味をそそる話だ。「コロンブスの卵」といふ諺があるくらいで、世界的な問題であったのが、この日に解決されたわけである」と続く。「朝日新聞では新鋭な科学者たちが大勢集まって九つの卵がちゃんと机の上に立っている写真を載せ、毎日新聞では日比谷

のビルでタイプライター台の上に十個の卵を立てている写真を載せている。上海でもニューヨークでも各記者、カメラマンのいならぶ前で、実験が行われ成功した」。承服できない博士は、普通の日に実験を重ねてこういふふう結論した。「少なくともコロンブス以前の時代から今日まで、世界中の人間が、間違って卵は立たないものと思っていただけのことである。世界中の人間が何百年の間、すぐ目の前にある現象を見逃していた、ということがわかったのはそれこそ大発見である」。立春の日には、私は生徒たちに卵を立てることに決めていた。揺れないしっかりと台を選び、静かな所でゆっくり落ちて着いて十分ぐらいはかけるつもりで調整を繰り返すと、ほとんどの生徒が卵を立てていく。不思議なことに、一人が成功すると続々と卵が立つてくるのである。

校長室には千葉県で採集した、七百万年前のカルカロドン・メガロドンというサメの歯の化石を置いてある。今日も掃除に来た生徒が不思議そうにきわっていた。『天からの手紙』ではないが、化石という『大地からの手紙』に喜んでいる様子に、私はひとり悦に入っている。

(すずき かずお)